

2026.01.25.

「このパンを食べる者は永遠に生きる」

旧約 申命記8章1～10節

新約 ヨハネによる福音書6章52～59節

1. はじめに

ヨハネによる福音書を共々に読み進めています。6章は「5千人の給食」という驚くべき出来事から始まりました。今日は初めての方もおられますので、少し振り返って説明します。この「5千人の給食」の出来事とは、男性だけで5千人、当然女性も子どももいたでしょうから、全体では1万人を超える人たちが、5つのパンと2匹の魚で満腹になったという出来事です。この5つのパンというのは、特別なものではありません。当時のユダヤ人たちの普通のお弁当です。直径15、6cmくらいの丸くて薄く焼いたパンです。そして、2匹の魚というのは干し魚です。これも20cmくらいの魚の干物を思い描いていただければ良いでしょう。パンと干し魚をちぎって食べる。それが当時のお弁当です。イエス様はそれを感謝の祈りを唱えてから弟子たちに分け与えます。そして、弟子たちはそれを人々に欲しいだけ分け与えられました。この時イエス様の弟子は12人いたわけですから、5つのパンと二匹の魚を与えた後、一人の弟子には半分にも満たないパンとほんの少しの魚しかありません。それを弟子はそれぞれ千人くらいに配けたわけです。常識的に考えれば、そんなことはあり得ません。ところが、人々は皆それを受け取り満腹したというのです。配っても配つても無くならない。とんでもない奇跡です。質量保存の法則を無視した出来事です。これはイエス様が神の御子である「しるし」でした。この地上で生活する私共は、誰一人として質量保存の法則から逃れることは出来ません。しかし、神様だけは別です。神様はこの世界を造られた方ですから、この世界を秩序あるものとしている物理法則の外におられ、これに縛られることはありません。

そして、この出来事の後、この出来事を見聞きしたユダヤ人とイエス様との対話が22節から始まりました。ユダヤ人達は、このような奇跡をできる人こそ旧約において預言されていた救い主・キリストであるに違いない。そうであるならば、自分たちの王となってもらい、ローマ帝国によって支配されている自分たちの窮状を救ってもらおうと考えました。何しろ、「五つのパンと二匹の魚」でこれほどの人たちを満腹に出来る事が出来たから、この方が王になってくれたならば食べることの心配は無い。それどころか、そのとてつもない力を用いてローマの軍隊を蹴散らす事も出来るだろう。この人を王様に上げば、自分たちは安泰だ。そう思ったわけです。しかし、イエス様はそのような人々の思惑に載ることはませんでした。なぜでしょうか？それは、イエス様は確かに旧約において預言されていた救い主・キリストでしたけれど、それはユダヤ人たちが期待していたような「地上の王」「ユダヤ人の王」「力の王」として来られた方では無かったからです。

らです。イエス様が来られたのは、「神の国の王」「愛の王」として来られた方だったからです。イエス様が与えようとされたのは、単なる食べてしまえば無くなってしまうパンではなく、「まことの救い」であり「永遠の命」だったからです。しかし、これが中々伝わりませんでした。人は目に見えることしか信じようとはしませんし、「永遠の命」などということは自分の理解を遙かに超えだことであり、とてもまともに受け取ることが出来なかったからです。それはいつの時代でも同じです。今の時代もそうです。人は目の前の日々の生活のことしか考えません。しかし、キリストの教会は、いつの時代でも、どの国においても、イエス様が与えてくださった永遠の命の救いを宣べ伝えてきましたし、宣べ伝え続けています。

2. 洗礼と聖餐

さて、今朝は聖餐が行われます。キリストの教会はこれを最も大切なこととして守り続けてきました。小さなパンをキリストの体として食べ、小さな杯のブドウ汁をキリストの血として飲みます。キリストの体を食べ、キリストの血を飲む。初めて聞いた人は、ぎょっとするような表現です。キリスト教が日本に入ってきたとき、「キリスト教は恐ろしい宗教だ。人間の血を飲み、人間の肉を食べるそうだ。何と汚らわしいことか」と言われたことが文書に残っています。実は、イエス様が復活された後、弟子たちがローマ帝国中に伝道していくのですけれど、そこでもこれと同じ批判がなされました。確かに、言葉だけ聞けばそのように思うのも無理ありません。勿論、私共が食べるのはただのパンであり、飲むのはただのぶどう汁です。しかし、聖霊なる神様がここに豊かに臨み、私共に信仰が与えられ、これをキリストの体、キリストの血として受け取るわけです。この聖餐は、イエス様が十字架にお架かりになる前の日、いわゆる最後の晚餐において制定されたものです。そして、キリストの教会はその時以来、この聖餐を守り続けてきました。それは、ここに永遠の命という「見えない恵み」が「見えるしるし」として現れているからです。この聖餐を保持し続けることによって、キリストの教会は「キリストの命を保持し、伝える務め」を果たしてきました。

「見えない恵みの見えるしるし」には聖餐と他にもう一つあります。それが洗礼です。この洗礼と聖餐の二つは、同じ恵みを示しています。洗礼はキリストの体に繋がる、キリストの体である教会に私共が繋がる神様との契約式です。そして、その契約に基づいて、私共はキリストの命と一つに結ばれている救いを与えられます。その救いの事実を聖餐によって私共は繰り返し確認するわけです。歴史を貫き、世界に広がるただ一つのキリストの体である教会。このキリストと一つに結ばれて、ここに満ち満ちているキリストの命に与る。それがイエス様によって私共に与えられた救いです。洗礼によってキリストの体に結び合わされた故に、私共はキリストの体を食べ、血を飲み、キリストの命と一つにされている救いの恵みに与るわけです。この救いは、私共の肉体の死によつて崩れてしまうようなものではありません。キリストの命と一つに結ばれているということは、肉体

の死によっても滅びることのない命、永遠の命に私共は与るということです。肉体の死によって失われるものなど、私共のまことの希望にはなりません。私共は必ず肉体の死を迎えることになるからです。その死を超えた命、永遠の命、復活の命、それがイエス様によって私共に与えられた救いの実態です。

3. 法外な恵み

しかし、誰もそのような恵みに与ろうとして教会に来はじめた人はいません。前任地のある婦人がこのように話していたことを思い出します。その方は、40才代くらい時に教会に来られました。理由は「何となく、自分が生きていく上での信念のようなものを持ちたかったから」ということでした。洗礼もそのような観点から受けたようです。しかし、礼拝に与り続けていくうちに、永遠の命という、自分が思っていなかつたものが与えられることを知られ、本当にありがたいことだと言わされました。これは本当でしょう。わたしも20才で洗礼を受けましたとき、永遠の命などということは考えもしませんでした。ただ、神様・イエス様と共に生きていきたいとは思いました。自分のことしか考えられないような者でしたけれど、「この方は愛は本物だ。この方と生きていきたい。」そう思いました。実は、そのような思いを抱くということ自体、既に神様との愛の交わりの中に生き始めているということであり、それは永遠の命に既に与っているということでしたけれど、その時にはまだ分かりませんでした。20才で洗礼を受けた時と70才になろうとしている現在の私と、神様が私に与えられている救いの恵みは全く同じです。ただ、その救いの恵みはあまりに大きく、法外なものですから、洗礼を受けてすぐに分かるということはありません。時間をかけて、少しづつ、よりはっきりと、分かる者にしていただき続けてきたということです。それが私共の信仰の歩みというものです。

4. キリストの肉を食べ、キリストの血を飲む

さて、今朝与えられた御言葉の直前48節でイエス様は「**6:48 わたしは命のパンである。**」と告げ、51節においては「**6:51 わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。**」と告げられました。これを聞いたユダヤ人達は52節「**どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか**」と議論し始めました。当然の反応ですね。イエス様は自分の肉が人を永遠に生かす天から降ってきたパンであると告げたわけで、どうやって自分の体を、肉を私達に食べさせるというのか？何を言っているのか、さっぱり分からん。そう思っても当然です。更にイエス様はこう告げられます。53～55節「**6:53 イエスは言われた。『はっきり言っておく。人の子（イエス様がご自分のことを指すときはこう言われます。つまり、わたし）の肉を食べ、その血**

を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。 6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。 6:55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。』この言葉を聞いたユダヤ人達は、いよいよイエス様が何を言われているのか分からずに混乱しました。それはキリスト教がローマ帝国に広がっていくとき、また日本に入ってきたとき、多くの人々が誤解したのと同じです。しかし、私共にはこのイエス様の言葉が分かります。それはイエス様の肉として聖餐のパンを食し、イエス様の血である聖餐のぶどう汁を飲んでいるからです。イエス様の肉が私共に永遠の命を与えるまことの食べ物であり、イエス様の血がイエス様の命を受け取るまことの飲み物であることを知っているからです。それにしても、イエス様はどうして「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」というどきつい表現をされたのでしょうか。それは「肉」が私共にとってどうしても必要な栄養を与える食物であり、「血」というのが旧約以来聖書においては「命」を意味していたからです。つまり、イエス様の命をいただき、イエス様によって養われて生きる。そのことをイエス様は伝えたかったからです。勿論、その命は永遠の命です。

イエス様を愛し、救い主として信じ、この方にお従いして生きていく。その時、私共はイエス様の命と一つに結ばれ、イエス様の心をわが心とし、新しい命に生き始めています。イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むとは、イエス様の命と一つにされるということです。救われるとは、このイエス様の命と一つに結ばれることなのです。そして、その命は終わりの日、つまりイエス様が再び来られる日、復活させられることによって明らかになります。

5. 肉体の命と永遠の命（まことの命）

ここで私共は、私共の「命」というものには、二つあるということを知らなければなりません。肉体の命があるということは、別に教えてもらう必要は無い、当たり前のことです。しかし、もう一つの命がある。それは、「肉体の命」に対して「靈の命」と言っても良いでしょう。死によって終わってしまう命に対して、「永遠の命」と言っても良い。イエス様は、十字架にお架かりになって三日目に復活され、肉体の死によって終わらない命を証しされました。ですから、この命を「復活の命」と言っても良いでしょう。この命は、手で触れて確かめることの出来ない命です。信仰によってのみ確認される命です。この「靈の命」「永遠の命」「復活の命」の大切な点は、イエス・キリストと一つに結ばれることによって与えられる命だということです。イエス・キリストというお方と無関係に、それこそ「不老長寿の薬」を飲めば与えられるという命などではありません。そもそも、私共がこのまで不老不死になるということは、幸いなことなのか？救いと言えるのか？自分のことしか考えることが出来ない、まことに身勝手な私共が、長く生きれば身勝手では無くなるのでしょうか。そんなことは無いでしょう。あの人とこじれてしまった関係が永遠に続くとしたら、

このわたしの罪が拭われること無く永遠に生きるのだとすれば、それこそ地獄なのではないでしょうか。イエス様は57節で「6:57 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。」と告げ、58節では「6:58 これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」と告げます。天と地の全てを創られた神様は永遠に生きておられます。そして、その独り子であるキリストも天地が造られる前から父なる神様と共におられ、昔も今も永遠に生きておられます。そのイエス・キリストと一つに結ばれることによって、私共は永遠の命にいきることになります。イエス様と共にある命、それは自らの罪を赦され、イエス様に似た者へと変えられていく命です。そして、その命は御国において完成されます。互いに完全にイエス様に似た者に変えられ、神の子とされた者として相応しい者とされるからです。私共はその日を待ち望みつつ、少しずつ変えられていきながら、この地上での歩みを為しているわけです。

6. わたしはキリストの中に、そしてキリストはわたしの中に

さて、イエス様は56節で「6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」と告げられます。これもややこしい言い方です。しかし、この言い方の中に、イエス様がどのようなお方であるのかが示されています。

私共がイエス様の中にいるとすれば、イエス様は私共を包んでいる考えるのが自然でしょう。逆に、イエス様が私共の中におられるとすれば、私共はイエス様を包んでいるということになります。それが、人間の考える理屈です。しかし、イエス様は神様ですので私共の理屈は通用しません。そもそもイエス様はどこにいるのか？わたしの中に、わたしと共に、わたしの上に、わたしの下に。どれでしょうか？実はそのすべが正しいのです。イエス様がわたしの中にいるならば、皆さんの中にはおられないのでしょうか。そんなことは無いでしょう。わたしの中に、皆さんの中に、そしてイエス様を愛する全ての人の中におられます。しかし、それだけではありません。イエス様は復活されて後、天に昇られました。イエス様は父なる神様と共に天におられます。では、ここにはおられないのでしょうか。いいえ、今、イエス様はこの礼拝のただ中におられます。もし、ここにおられなければ、私共がイエス様に祈っても、イエス様を賛美しても、イエス様には届かないでしょう。しかし、イエス様は私共の祈りを聞き、私共の賛美を受け取ってくださっています。イエス様は天におられるだけでは無く、ここにおられ、私共の中におられ、そして、私共の下にもおられます。私共が歩む一足一足を、下からしっかりと受け止めてくださり、私共がよろけず、転ばないように支えてくださっています。

私が今ここにいるということは、牧師館に私はいないということです。当たり前です。しかし、神様の独り子であるイエス様はそのようなお方ではありません。それは、イエス様が神様だからで

す。天地を造られた父なる神様と一つであられるイエス様は、最初に「5千人の給食」の話をしたときにも申し上げましたけれど、この宇宙を秩序づけている物理法則の外におられるお方だということです。神様・イエス様のことは、私共には分かり切る、完全に理解するということはありません。私共は神様によって創られたものであり、神様は私共を創られたお方なのですから、当たり前のことです。

しかし、私共に分かっていることがあります。それは、神様・イエス様は私共を徹底的に、完全に、愛してくださっているということです。私共の良い所だけを愛しておられるではありません。欠けがあり、愚かで、身勝手で、そのくせプライドばかりが高い。そんな私共を丸々、そのまま愛してくださっています。その証しが十字架です。私共のために、私共に代わって、私共の一切の罪の裁きを十字架の上で我が身にお受けになるほどに、私共を愛してくださっています。自分を侮り、無視し、遠ざける人を、私共はとても愛することなど出来ません。しかし、神様は愛してくださいました。最も愛する独り子を身代わりに十字架にお架けになるほどに愛してくださっています。私共はイエス様の十字架の愛に出会うまで、本当の愛を知りませんでした。人間の愛しか知らなかつたからです。しかし、神様の愛は果てしなく深く、豊かで、徹底しています。何度過ちを犯しても見捨てる事はありません。だから、私共は今朝、ここに集うことが許されているわけです。まさににありがたいことです。

この後、私共は聖餐に与ります。聖餐には、世界中のキリストの教会が二千年にわたって守り続けてきたキリストの命があります。イエス様はここに臨まれ「わが肉を食え」「わが血を飲め」と十字架にお架かりになられた自らの体を私共の前に差し出されます。ありがたいことです。共々に今、キリストの命に与り、この救いの恵みを与えたもう神様に心を一つにして感謝の祈りを捧げ、共々に御名を讃め讃めたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝、あなた様は聖書の言葉を通して、信仰によってイエス様の命と一つにされたものは、永遠の命に生きると教えていただきました。この恵みの中に生きる者として、あなた様は私共を選び、招いてくださいました。ありがとうございます。私共が聖餐に与り、この救いの恵みにとどまり続けることが出来ますように。どうか、聖靈なる神様の導きの中、御国に向かって健やかに歩ませていてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン